

東仕立の魁

五三三

特47

106

館書圖京東

函二二

門新

架一〇

部七

號

類三



京仕立花の魁

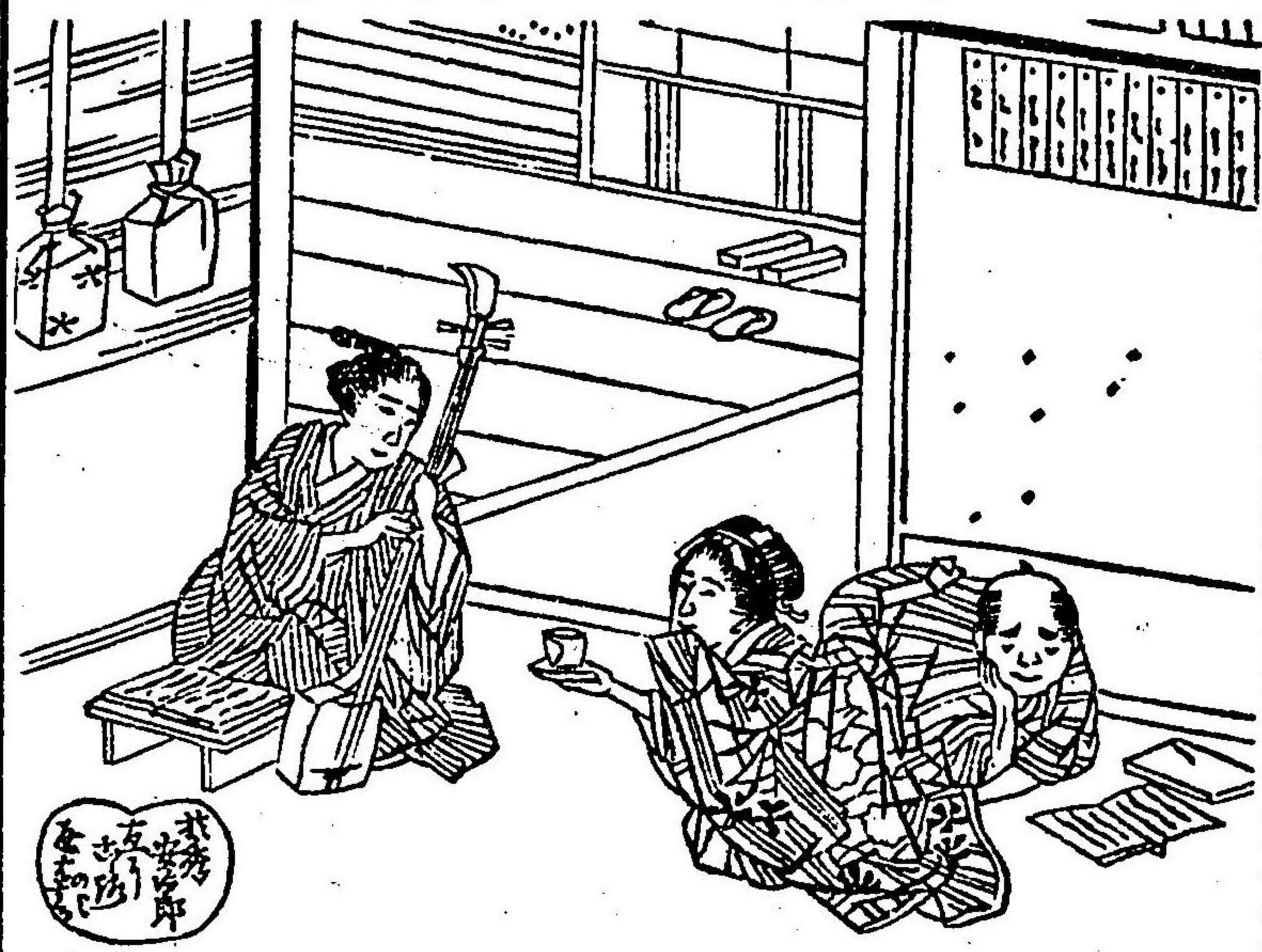
植村太平編輯

誠や情の道の神靈の扶與にして其情過る時の心神を損じ足らざれの人に倦まを孰れも
 その度と護るに老らずと茲の花咲く浪花ある曾根崎村六番地に住濱田平兵衛方同居
 する同人の甥松下安次郎(二十)より幼少時に父母は死別れ其後伯父引取れ養育と
 請々て成長せしが生質温順く教ふる儘に讀書や算術も亦も能覺之殊に頗る美男子かれ
 平兵衛夫婦の實子なき故我子の如く寵愛み往々の養子あして老を樂まんと思ふに就
 ても渠の姿の優しきのみか心も女子のやうなれば慰みあがり三絃を習ひせたらと女房
 の勤めに平兵衛も現もと思ひ安次郎が十六の歳に梅檀の木橋南詰にて舞と三絃の師匠
 とする藤間お玉の弟子とせしよ素より渠も好む業にや幾程もなく糸道も明き僅のうち
 に上達して門弟廿餘名の中での第一等とも言れる程故安次郎の滋々勵んで毎夜稽古よ
 通つて居たが此師匠お玉の妹に名とお秀と呼ぶ、姉あも勝つた別品も糸道と曳
 輩もあれど斯る稼業の娘に似ず殊に十四の未通女かれを顔を赤めて逃廻るのみ色氣老

ら齒で居たるうち不圖安次郎が此宅へ稽古よ來初頃よりして月下氷人の戲事や女
 兒心お思込み目顔よ夫と露のさねど獨胸のみ焦して居ると思ひは同じ安次郎も俱に其
 氣の有馬山いさよはわらぬ稻船の瀟立つ胸は遺瀬あけきと只恥のしんが一ぱい故夜毎
 に顔の合すれど見て見ぬ振で其年も過しが什麼此藤間の母といふのお直といへる狡猾
 者にてお玉お秀の姉妹なごら藥の上りく親知らず貫ひ受たる養女もあ師匠と言ふり表
 向内緒は通ふ弟子のうちあて襟元の能い息子と見ると娘と解をよ金おとる胸算用をし
 て居れば既に姉のお玉よの平野橋東詰の河藤の弟息子龍助といふ者と内々旦那のやう
 にさせ多くの金をせしめ故お秀も今稔は十五にあれば能い鳥ものゝろうと思ふ折の
 近頃頻りに遊に來る南久寶寺町邊に住或問屋の若旦那名と久吉(三十四)と言者は顔の
 三文が物もさい餘程醜い男あきと形装の袴へ持物などは五分でも透のぬ當勢打扮殊よ
 の紙幣をペラ〜遣つてお直お玉お秀等と連ては諸方を飲歩行價の高い品とも厭のま
 姉妹に買て遣る体が只でいなと勘を付るとお秀も十分氣がある様子お直お玉と

歡んで否のるお秀と久吉よあびかせやうと計折りら久吉のお直等母子と引連れて今日
 の料理屋翌日の芝居と頻りに金びらを切るうちにもお秀に心のある素振がいよ〜お
 直の目に見えるも久吉の來る度にお直の事に假托て其座と外すようにすると久吉
 の能えはど自己が顔の不印も自惚鏡の最負目よの自分極めの業平氣取で折〜お秀を
 捕へての氣障な文句で口説ても其度毎にピンシヤンと刻付ての迷廻り後は久吉の顔を
 見ると躲るやうにされるので案に相違のしたされど久吉は尙思ひ切られず此上の親
 お談金の威光でなびかせやうと或日博勞町三休橋角の二葉と言割京店へお直一個と
 呼寄せて程よく酒を勤め後お秀の事を言出してお前のウソと言て呉き先當分は妾
 宅を設け仕度金のら月給あども望み次第お出しもする其うち親父お断として本妻に
 直した上では生涯お前が樂に暮せる手當も十分して進やうが何と承知の出來まいのと
 言ふの道方の思ふ笑聲と腹の裡でい歡べど手輕く〜の物がなけば思入渠よ氣を持
 せ其後お事を纏めれば骨折賃にもあり付譯と其所は夫者のお直丈思案をまづ、打點頭

さ不束お娘をば然う仰しやつて下さるは親の身にてのお嬉しく早速お受もする筈なれど此道心のははッヒ斯うと親の儘もあまませず渠にも篤と申せ其うち否やのお返事と言ふを久吉聞あへず是のしたりお直さん假令那嬢は何と言ひふが得心させるが親の權私も今更言出して指と脚へて引込やうで男の顔も立兼れを枉てもお前け働さでも再び言れてお直の打笑みそとやはや是まで御最負おなまつて下さる貴君故此お断しと言聞せたら歡ぶふどの思ひますれど何と言ふにも未通女もゑと溢るバ尙も急迫立



て其未通女なのが此方の執心是非早急お返辭と頻りに頼めば又點頭さ夫程まで仰しやるからのお秀の何と申さうとも何様のお顔の潰れぬやうと言ふは歡ぶ久吉が夫で私も落付たが噺しおばかり身が入るので何だの酒が理に落閑暇で居るからお玉さんでも此所へ呼で下さるまいかと言ひれてお直が身を起しそんあら一寸私が行お掛ると押し止てお前が態く行ないでもッヒ迎ひに車夫と言ふとお直が聞あへぞイエ私が参りませねば些不都合事もある故ッヒ行て直参りますと再び立は久吉のそんあふ是で車までもと一圓札と投出されエ、めつさうおと空辭義して戻しお掛ると無理やりお直の懐中へ押おむにぞ入齒露はす笑ひ顔莞爾く物で立て行く其跡で仲居の酌にて久吉の獨グイく飲で居るうちお直が再び遣て來た故オ、お袋の御苦勞くシテ師匠のと尋ねられハイ今戻つて見ましたと東堀の龍さんが私の留守よお出なさきて何所へやうお連なされ生憎宿に居りませねを今日お招きにきつた事を歸つて渠の聞ま一さら残念がるでございませうと聞も終らず勃としてあんまり然うでもありませぬ

殊にお連の龍さんでい嘘お樂事だふドレ〜私も歸ませうと羽織引掛け立にかゝるをお直は慌て押止め折角のお招きもゑお玉の居るね中譯お秀に代つて来るやうにと言付て置ましたれば只今髪と撫付て跡うら爰へ參る筈併集でいお座敷のお興にもありますまいの何卒御不勝遊ばしてと言ひれて這方は飛立嬉しよアノお秀嬢が来ますとへ夫の本眞の事ういお實り那嬢が呼たけれど最前頼んだ譯もある故云出し兼て遠慮としまし流石の粹なお直さん是大出來〜と俄に衣紋と繕ふやら髪の髻挿撫廻して立たり居たりして居る所へ階子の音がト〜として頓てお秀の揚つて来る顔を見るより久吉と涎の一寸五六尺は(些お負だ)否がるお秀の手と取て自分の側へ無理お居らせハテ何時見ても美しい醜れるやうお愛敬女兒まづ兎も角も思さし香すバ私が助かからぬみ〜一盃受さまへと夢中になつて肴をも尙幾鉢の其所へ出させ嬉し紛れお數十盃引受〜傾々さればとや十二分の酔が出て廻らぬ舌で種〜と例の淫風な事と言懸け果にお秀の首筋へ片手を掛て抱き込み懐へ手とさし込めど淫のまじき振舞とお直

い見を答もせず機嫌とり〜座を持てお秀は口惜く腹立しけれど母の前も強くも言へお振放さうおも男の力餘りの事お堪の暇て覺えずオロ〜泣出せしおは其所は醉人本姓違はず些氣の毒お思つとや久吉も悪戯事と止め爰と座鋪もしつけたら何所ぞへ行て吞直と迷惑ぶふが二個とも是非附合てお異なさんどヒヨロ〜足にて二葉櫻を出ればお秀の此先ごんる目お遇されやうかと氣遣へハ何卒程よく斷つて些とも速く歸りさいと内々尋いてもお直は聞えぬ振をして頓て二輛の人力車と雇ひ慄へく否がるお秀とば久吉と合乘にさせ自分と別の車に乗引出一殊に夜道の事なれ此儘何所へ連行を又ごんる目お遇ふ事や母の胸さへ測られぬに久吉の又酒臭い顔とお秀お摺付てい悪戯事と仕掛らる逃出しさいにも車の中今更何と詮術もあみだるが身に身と縮め生た心地もなきうちに姑くあつて車が止り掛たる母衣外せ〜何所と見廻こに思ひ掛るさ我門なればヤン嬉しやと飛下りて其儘宅へ駆込たる折柄奥よりお玉が出てオヤお秀おのへりかシテ母さんはとたづねても只泣のみふ返辭も出ぬ何の様

子のある事とお玉も不審お思ふ所へ頼てお
 直の肩より、り千鳥足よて久吉がドサリサ
 跡の道入来たれば借りとお玉は察しなが
 ら俱に手を取て奥の間へ伴ひさきと頭部六
 もる其儘其所へ蒲團と敷枕とさせるも久吉
 の前後も知らぬ高刺にヤン草臥やと言あが
 ぶお直と勝手の手火鉢の側で烟脚吸付くも
 しなから此時までも片隅お尙伏沈んで泣て
 居るお秀と尻目にシロリと見てエ、又して
 もメツ〜と嘉祥くもない其吼面和女も十
 五にあつて見を心何時が何時まで此母や姉
 の臍とのぢらぞと相應な客でも取り長の年



月元手と入れ養生と遣た埋合せとろろ〜せねをさるぬ年齢幸ひ奥に寝て居る久さん
 和女に續根氣がある体は敏のふ夫と察したの果して二葉で是〜と私を呼での打明断
 し直にアイとも言ふべきだが和女に一應言開せず返辭をしては跡の面倒其上些と都合
 もあれを手重いやらふ言くの置けと遅のれ速かれ那人と客にする氣よなつて居や併大
 体懐中の様子も知れぬ息子様甘く煽動て遣はせき長く見く三月の四月お金の融通の
 道も絶親の勘當の知れた物其間お取込で和女の衣裳と十分お拵へた曉は當所で指折の
 金満家の又の立派お官員さんの權妻かゝして奥さまにも成上られるの働さ一ツ如何年
 端が行ぬとて恥の〜がるも程のある怖い夢でも見た氣よあつてアイと返辭をして呉る
 何をウザ〜〜居るれた年が寄と氣が急迫〜い夫とも黙止て泣く居るは此身れ言ふ
 のの不承知かイケふて〜しい根性骨ウヌガ三ツの歳の暮襪一枚着て裸へて居たよ
 餘り惘然に思つた故親よ大枚三圓といふ大金を恵んで遣り音信不通の約束で貰ひ受た
 其日くら喰せるばのどか諸藝と仕込み暑さ寒さの着類まで不自由もあくして遣た大恩

のある母親も何ぞ不足で物を言ぬ然さういふウメの根性さう二三百里も遠い國の娼妓
 みでも叩き賣金もして腹を癒ると大聲立て怒鳴付られお秀のいと哀一と又口惜
 さも一はよと絶入るをかり泣沈めばお直は尙も焦燥て烟管を取て立のり打も居べ
 き形勢をお玉が見兼て中お入るまア〜待くと押しお玉と母お對ひお腹の立も無理さ
 らねど何と言ふも内氣の妹ツヒおいと返辭も出来兼ねるのでお直ませう殊よ
 奥お久さんもお出があつて見ますれば此内幕と聞れるも如何のやうお譯合ゆへ私におト
 ックリお秀の腹と承つて見ませうか貴女の姑く二階でと言ふよお直の打點頭さそ
 んあふ和女に任せる程に味よく勤めて得心をさせるやうにしてお呉其うち二階の小座
 鋪でドレ一寐入して来やうと下女に燈を持せながらハツク階子と登り行く跡とお玉
 が見送してホロリと離す一滴の涙おさへてコレお秀嘆哀しお直も道理はお前ばりりか
 私とても幼少と死に此家へ貰ひを實の父さん母さんのお顔は素よりお住居もお名とも
 知らぬ果敢きい身の上の胸窓お母さんよ長の年月責遣われ強面哀しい折毎に寧死だ

ふ此様お苦しい事もあるまかど覺悟としたも度くなきと若存命て居らば眞の
 親も一目でも會れる事もあふふうと夫ばつかもと樂みに泣顔匿す愛だ幸抱師匠とま
 でのあつたれど地道な稽古をのりでは甘い寐酒も呑ぬとて那東堀の龍助さんを是悲と
 も私の客よりと丁度お前に久さんと勤めるやさき無理難題否〜あふぬ故その時
 も死なふかと迫る心と思ひ直えて始の程は鬼どもも寐るようお氣で居た所が二度の三
 度と構やと手厚くされる深切お最初嫌つて龍さんご後に結句可愛くあり實意と盡
 すやうにあると又増す苦勞は母さんが無法お金を遣ひ捨させ夫故お龍さんも親公の前
 が不首尾になり今で心齋橋通りの御親類へ預の身ゆえ金の都合身の廻りも思ふやう
 よは出来兼ねるを乞食のやうに賤しめて折〜遊びお出でも何故来るといふ顔付で那
 母さんの不會釋私ハ夫が氣の毒でトサ斯う言ふと私の恍惚と断とやうで可笑しいがお
 前も年が行ぬ故只く怕いと恥のいで返辭も出まいけれと客よしならは久さんご又可
 愛くある顔もあらふの悪い事は言まいのら能く考へてアイとお言ひ私も自分の身に

つまされくお前が惘然でなうねどもあ、言ふ非道お母さんに養はきたが互ひの不運世は七轉八起と言へを今の辛苦を普語りに又する時もあるから私に異見としたらとて義理に迫つて思詰め若もひよんお氣にであり尙此上の哀しみと私おさせくお呉であると眞實見ゆる姉の辭にお秀は嬉しく思へども心の底に曾根崎の彼安治郎と見初てよりまた下紐の關のみ口口に夫ども言出さねども他一男も肌ふまじと立し盟ひもある物を假冷どういふ義理ありども今更仇もと做一ぐらしと言へ姉の深切ある今の辭も無よ



されずと娘心よとつおいつ思案お胸を苦しむ折柄奥に寝て居た久吉が目と覺せしか手と敲くとお玉の速くも聞き取てソレお手が鳴る行て見やと指揮に下女とさし心得コツアへ水と汲で行と大層酔たと久吉か忽地水を三四杯帯へ直して勝手へ立出是はくお師匠さん大酔で大失敬最前ちよつと二葉からお招して進まれば例のお方と何所へやらお楽しみと羨ましいと言つ、其所へノコくと居り込ふとして見よが姉妹の体が何とやら愛と含んだ顔付も流石居るも間が悪く秀ちやんアハヨとそまゝに心残して歸行斯てその次の朝お直は疾く起出てお秀が何と返辭をしたかとお玉お機子が聞えければツヒ邪門なる人おどが来て聞折もあく打過るうち彼二葉かお車を曳せお直とお秀の迎ひが来たお秀と又かどツツとしたお直と何と思つたやふ其日にお秀と宅へ残り自分一個で行よるお秀とホツと息を吐よが又久吉が母さんに我が身のことと追らふると胸を痛めて居たる程も二葉には久吉がお直一個で遣て来た不興の体に見ゆるおへ夫と察してお直はうち笑今日もお秀と同道せよとのおむのひでとありま

しるの渠が泰るとお咄しの些致しにくい場合もあれば態と連すお泰りましたと言ふお
道方と機嫌と直し然ういふ譚なら宜けれども氣長に待との昨日の断を併私も言出して
べんくだふりにあつて居てと商賣事も手お着す世間の聞へも宜しくなければお秀と
呼で三ッ鐵輪で今日は是非とも取極やうと實の呼あ上たのだが那嬢が居てと咄されぬ
と云と大方〇式の内輪咄えと思とれるが金づくでなるとならをコレ此通りと懐中か
十圓札と五枚取出是が當座の仕度金その内には妾宅も構へお前も頼て左團扇彈り赤が
ふ龍さんのやうお師匠とさせて見ては居あひ然うして那嬢の返辭はと紙幣をヒラ
見せ懸赤がふ問はれてお直は目を細く一夫程やでお仰ーやるらうは假令お秀は赤んと
いはふと親の威光で壓つても屹度貴君のお望みと適へるやうお爲ませずが其替りに
は五十圓と言と久吉聞あへず得心ならば右から左り今でもお前に渡して遣るとお直の
前へ紙幣を出され身の慄へる程嬉まにとんあら今夜お秀と説付難波鐵源寺前の豆茶
屋やで急度連て参りませう然とれば何れ戴くお金是は此儘私がお預りませう

と言つ、紙幣を懐中へ入れよか、ると久吉の一寸お待と差止めお袋お前の事だか其
所らに如才はあるまいが得て金銭と言ふ物の間違の出来たがる奴お秀の返詞も聞ぬら
ら此金を手放すは工合の悪いやうでもあはばどうか那嬢と連て来てはよ〜〜得心と聞
た上金と娘と引換に渡した方が互ひに能うらふやうに思ひれるがお前何と思ひあさ
ると流石の問屋の息子丈算盤づくには抜目なく言懸られくお直婆アが這奴なか〜〜白
い齒を見せて行ぬと思つと故何ぢやんお久吉さん遣ふと出したお金もへお禮と言
取たと私の心を疑つてやら些耳障りお今のお断し然ういふお前の了簡では往〜の
相談も折合事ではあませねば改めく私のお断とやますナ〜今度の一件も此方で
望んだ譚でもなくお前の方ら是非共にどお頼が有と故間も潰せは骨も折〜後まで
運んぶ物のらんきに惜いお金なら私も意地な貰ひません大方お前心では那嬢を散〜
慰んぶ上果何どの難辨と付け僅の金で追拂ひ世間の人に自慢〜吹聴とする積
怖やの〜すんでの事此年寄が虚心を深みへはざる所であつとと〜疾く歸り

ませうと彼五十圓と其尻へ投出し挨拶もせず立揚ると這方は慌て引止め然う言ふ氣で
 い決してゐるア下に居て言ふ事と袖あすぶると振拂ひ行ふととると久吉が尙も止
 みる悶着最中此二葉樓の女主お龜が銚子と携へあたら不圖次は間まで來り、つて思ひ
 を様子と聞た故程を見合せ座鋪へ遣入り何の譚ぶか知りませんのアお静にどお直と
 宥め又久吉にも花を持せて甘く其場と取扱ふ原まのお龜は西京ある八坂新地の藝妓あ
 りしと久寶寺町の或金満家が先頃勤を廢させ此割烹店と出させたれ故酸も甘んも知
 り抜た大姉への扱ひでは駄々を言ては損だと思ひ終ふ斷が和らいでお直が預り証書を
 差入れ五十圓の金と受取たのらはお秀に屹度得心させ今露豆茶やへ連れて行く手筈は
 斯く云々と謀合せて別れしが是より先にお秀は又今日二葉か久吉の母さんと招い
 たは我が身の上の事であらふいよく斯と逼られたらコトヤ何として能からふと女兒
 心に決しかね只片隅に俯向ては泣よと他は術もあた心と察してお玉はさし寄りお前が
 噓や哀のらふと思へば胸の一ぱいで異見のしやうもあいけれど昨夜も呉言た通り

幼少とさうら養育のいた恩義を極め掛くを
 て私が何と執成ふとも那母さんが耳にも掛
 けて下さるまい此上お前が情と張り君傾城
 又賣れてお見夜毎お換る客の中に久吉さ
 んお輪を掛た否な人でもおびかねばあふぬ
 のが苦界の勤め爰等の道理と考へると一個
 のお客を持つ方がまだ能くふと思はれるが
 お前何とお思ひだ併私は無理にと勧めぬ
 他は思案もあるとあら遠慮のあいか打明
 て私に言て聞せてお呉と親身も及ばぬ情の
 言葉にお秀はいよと胸迫をど否と言れぬ
 義理話に只ハイと點頭はそんなら道理



を聞分てお前は承知としてお呉かと言へ私私義理を立一旦ハイと得心まで若まゝ短氣了簡でも出てヒヨンなどでもあつてとならぬ其所は呉承知のへと期と押詰て居る所へお直之ハダクサ立歸りお玉和女に任せ置たお秀の返詞はどうだと問はれハイ種々ふ断しましたら漸此疎も荒増はオ、得心一と云ふかお秀和女は賢娘い者ぢや夫でこそ此母の長年養育た甲斐があるコソ見や一寸仕度金と受取た五十圓是の他には遣はずにみんな和女の好き着物を買立て遣る程に是から先も久さんの鼻毛と算で〇印と引出す工面が肝必要是で断しの整つた小賣物おと花とやらお玉お主も手傳つて能く化粧もさせて遣りや冬の空として日の短のさササくすると日が暮ると喋り散して急迫立られ浮ぬ心も今更に是非もあみだの顔匿し頼くお秀の支度も出来れば母と合衆の人功車で難波鐵源寺前の豆茶屋へ行着頃は日も暮たるに久吉と最前より首を長くし短のくまぐ待ち散々たる折のふもゑ夫と見るより夢中にあつて是のお袋お手柄く餘りお出の遅いもゑ實は内気氣を揉みながら獨でグイグイ飲で居た何は兎もあれ歡び酒と今夜

の寛りと過して下さいお秀お主も聞分て能得心して呉れは是くら此身の可愛がつて芝居はござれ寄席のござれ好き所へ連れて行コソサそんなに慄へせと怕いと此些どもあい併お袋此やうに恥のしがるのが賞術所今夜寝たを何様であらふと思へは堪へられないと一個放心飲うちよお直の程よく粹と通一小用の振で座と立バ能の沙合と久吉が否がるお秀の手を捕へ床の中までの無理に手と取り引込れたが何様考へても久吉お身を任せるの否て堪らず少しの間でも逃れやうと腹が痛むと言拵へ顔と老のめて俯向と久吉の氣を揉で困つた事と遣出したが幸ひ所持の寶丹があればマテは是を水で解て口移しにして吞せて遣らふナ、藥は嫌ひだど夫も腹と押へながら和く針をいて遣らふと抱き付れて身を縮ませ悪戯事お事をさると私宅へ歸りまそと起にかゝるを押へ付々是は又短氣お事そんなら痛みの治まるまで此身も小僧も辛抱して徐く脊中と撫て遣るうら氣を落付て寐て居ゆれと詮方なさに久吉が憐る心を押鎮め渠の脊中と摩るうち追く酔が廻つて來く覺へず知らずツスリと寐入込たる高刺此とさまでお

秀の荷生た心地もせず居たの渠の剣の耳入りに入りに怖くあがり覗いて見ると前後も
 知らぬ体ある故まア能のつたとは思ひながら今も久吉が目と覺さず手込にささるは
 知きたと夫より寧此間お逃して何所ぞの淵川へと女兒心よ念ひ詰そつと臥房と脱出て寐
 衣の儘の歩行既足慄へる足と踏めあがら裏の切戸と押明忍んで出ても眞の暗何所
 と當と定めねど若久吉の目と覺し追掛て来はせまいかと夢路を走る心地して北へく
 と行く程は兎角して難波村なる土橋の邊りへさどり着しに跡より追來る体もさ々さば
 ホット一息吐あがらも尙心の急迫るを解けかゝりし細帯と上げあがら又も走りて
 終に幸橋へ來れば此所を此身の死所と小石と拾つて袂へ入れ一途死あふと欄干へ足
 を踏掛までしたが又情くと思案をするに血筋も及ぬ姉の深切必ず短氣事とせる
 命のわれを眞實の親に會する事もあふと嘔て合める昨夜の異見殊に眞の父さんの
 お名の定りよ知らねども母さんの名のお宇野と首て出雲の國松江の城下堅町との言ふ
 所ふ幽かな暮しをささるとやら此間今の母さんが他に断すと物陰から聞けば逢なく懐

しく夫や是やを思ひ廻せば今更此身も捨た
 くない幸ひ今宵の母さんが那豆茶屋へお泊
 り故是のら竊に宅へ歸とお玉さん一目逢
 て覺悟の様子と断しあは又よい工夫のあら
 ふも知れぬ假令夫まで行のすとも別れも告
 ずに異見とも聞ずよ死だと思はれたら後の
 怨みもぬらば有り思ひ直して裾取上げ東の
 方へと行折から遙かに聞ゆる鐘の音と算へ
 て見ればとや四時ゆゑ又種くど考へれを
 最前豆茶屋と脱出して餘程の時間も過たれ
 ば定めし久さんの目を覺し私の居ぬので騒
 き立今頃の母さんが宅へ歸つてゐやうも知



れず其所へ私が行合さば愛目に遇た其上に否應あしひ久さんの若手込にでもなるやう
での死にも劣つた此身の恥未練を事を爲やうより矢張命を捨やうりと賢嬢のやうでも
歳にまだ二八み足らぬ小女兒の兎も角頻りに心迷ひて那方這方と迂路付ぢち堀江橋の
際まで來しふ既に東も少一自みはやらしくと人顔も見へるばかりありしゆへ最
是までと心を決し堀江橋の真中より西に向ひて手と合せお顔も知らぬ父さん母さん先
立不孝の許してたべ別て義理あるお玉さん可愛がつて下さつた恩と仇にして歎死と懸
るも是悲なる場合どうぞ堪忍して下さい南無阿彌陀佛と唱へもあへず躍り込まふとす
る折のら橋の此方の物蔭に怪しい素振と最前より様子窺ふ壯者がヤレオア待たど駈寄
てお秀と確と抱止れば放して死せと悶くを尙も手と弛めず死あふと覺悟をされたに
の深い仔細もあふふけれど目お掛つての見逃されぬまア其譯とと言さるる思はず見合
す顔と顔お前の藤間のお秀さん然う仰しやるの安治郎さん是れ何様だと打驚く後の話
しの後編にて説出す

明治十一年十一月八日御届

同 年 同 月 刻 成

京都庶平民

編輯者 植村 太平

兼出版人

下京第十三區奈良食物町
三百七十貳番地

西京新京極蠅藥師下ル

製本賣捌所 太田 權 七

同新京極三條下ル櫻ノ町

同 原田與三松

賣 西京寺町御池下ル 壽 昌 堂 大坂平野町淀屋橋筋 石川 和助

同東洞院七條下ル 四 達 堂 同備後町心齋橋角 泉 萬助

大坂心齋橋備後町 吉田 平助 同淡路町心齋橋東入 坂田 傳七

同心齋橋北久太郎町 柳原喜兵衛 丹波龜岡河原町 内藤 半七

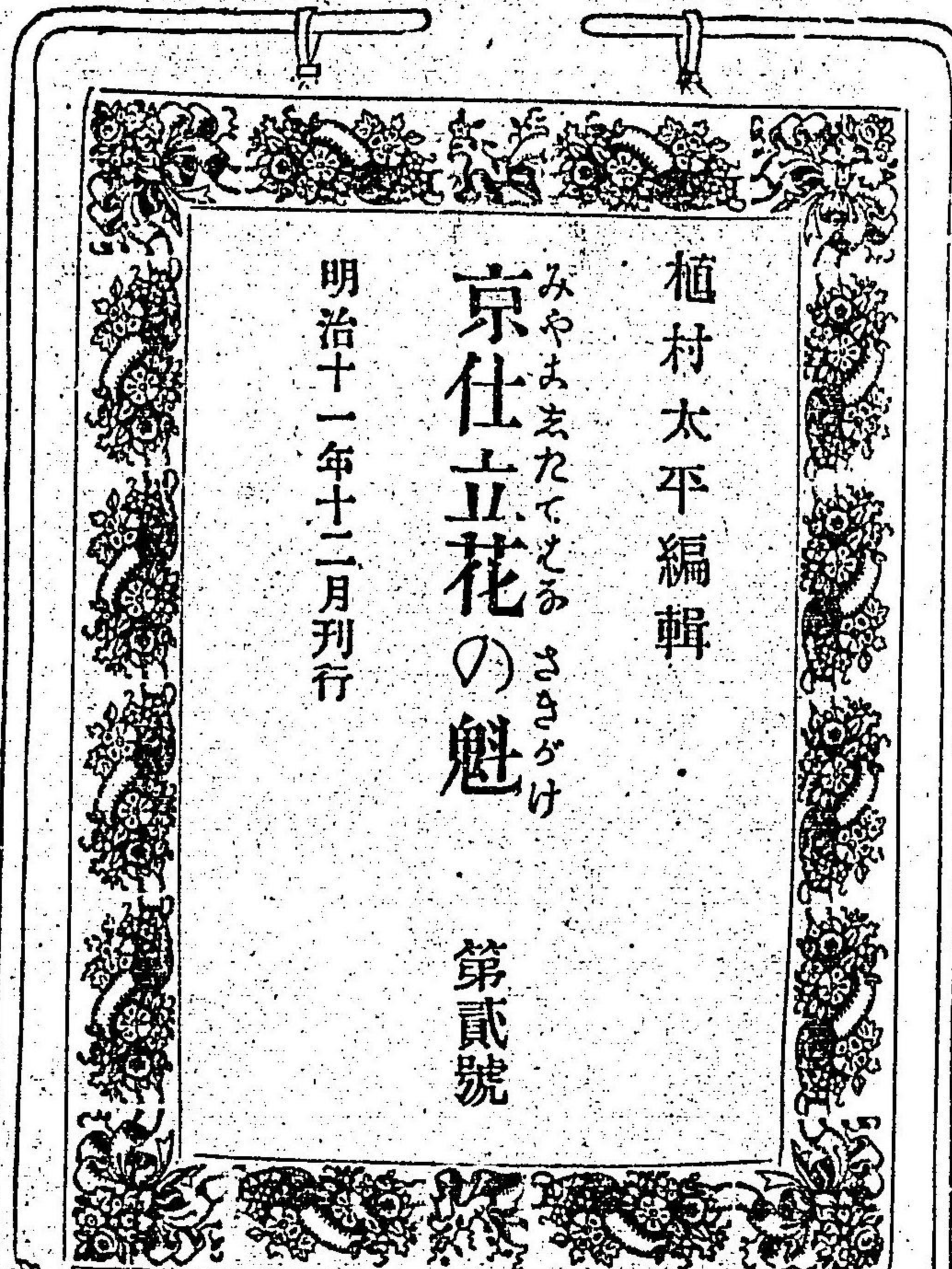
同高麗橋三丁目 集 成 舎 江州大津今とろし町 勸善舎支店

同堂島中一丁目 靜 雲 堂 江州八幡橋町 大内 弊六

所

捌

賣



植村太平編輯

みやままたてとあさささげ
京仕立花の魁

明治十一年十二月刊行

第貳號



定價金五錢

印刷村上活版所

京仕立花の魁第二號

植村太平編輯

却説夫れ誠ある人を知ると誠薄き人を以て知る釋迦も提婆普公も時平の爲に其號著し
 どのやろれおはあふて愛に又不通女お秀は一心不亂今や入水と見へたるを人有りて危
 き所を救ひぬれホット一息仰き見れば余人ならず兼て娘氣に思初たる安次郎にて前髪姿
 も早晚に元服してぬとい尙打上りたる人柄に胸の焦せど打つけお言寄る便りもあつと
 一必死の場所と救はれぬは夢のとばかり驚きしが寐衣姿のしどけあきを見らるゝも
 又恥しさは顔赤らめてさし俯向を諷と知らねを安次郎の頼りに氣遣ひ側へ寄と死なふ
 と覺悟と爲なすつたには何う仔細もあらふけれと彼是するすち夜も明れば人目お掛つ
 て宜あるまい私を送つて進るかゝ些ども速くおア宅へと急息立られてお秀の哀しく私
 はどうも腰間へのかへられせんと泣出すはぬよ／＼不審と這方はさし寄サア夫りと
 言のんとしても未通女氣に只恥のく口ごもるを展問れて匿もせられず實は斯々云々

どわとし様子の概略を断ると安次郎は滋く驚きある程然う言ふ理屈で此儘宅へも
歸られまいが併死ぬゝ及ぬ事萬事私に任せさいと言た所々往來端で永い断しも
して居られぬ何所ぞへ須臾と考へたがナ、幸ひの所がある私共の兼く懸念にとるお虎
といふ婆さんが北の新地の下原に居て單身者ゆへ遠慮はあいまア兎も角も那所へ行て
治すの付く相談とど優しい男の深切にお秀も今ハ死ぬ氣も失ヤレ嬉しやと思つたので
張詰た氣が弛みしよ身もガツカリ勞れ果跣足で歩行た足の疵の俄に痛み出て來て
さも苦一氣にみゆるお安次郎は心配して準備の薬を口に含ませ血だらけにあつたお
秀の足を手拭を裂て結びおとせる其うちに夜も明はなれ追く通行とる人達二個の
姿をシロくみて不審さうは行過れば若知己に逢でもしての頼りに氣を揉てゐる所
へ折よく朝仕事の人力車夫が空車と曳て來た故安次郎は歡んでお秀と合乘にて其車と
雇ひ北の新地へと急かせつ、程なくお虎婆アの住路次口にて車より下り渠が門口へ行
てみよばまだ戸締りをしてある故お婆キツイ朝寝の仕やう一寸明てと叩けばアイと答

へて目とことりあがらお虎は起て門と明るを待兼顔ある安次郎の些お頼があつて來た
が他にお客はあいかと聞たりバオヤ安さん早朝うと殊もお連もゐる御様子と言つ、お秀
の体を見て是ハナツキリ連送と早呑込の早合點で別あさし合の客もなれば遠慮あ
さるよ及ません斯うみた所が寝衣姿比朝風お吹れてのお寒のつたでありませう何かの
断しの跡よし私共の寢穴の此小夜着と安さん二階へ持て行て能暖めてお進さいと深
切振に安次郎の困と何も然う言ふ譯柄ではと言ふをお虎は打消てハテ言譯に及びま
せん私も是ても粹の果そんな氣兼は入ません今温かい御飯を焚て持て行て進るまで寝
るとも何様ともささるが能とお秀の汚きた足と洗いせサア疾くとせり立二個と二
階へおし揚らお安次郎のお秀が如何にも寒かふとお虎の寢て居た小夜着を其儘抱へ
て二階へ揚り風邪でも引と思いかと寝衣の上へ羽織着せ乍ら最ふ此宅へ來たからは
案卜る事ハ些ともあいな然う去て足はどうだへと惚た男お介抱さ身にみく嬉
しさお久し振おて莞爾笑ひ顔厚い貴君の御親切で足の痛みも追々に軽くあつたとお言

のか夫で私も落付た夫に付てもお前の身の
 上のまんざ断しの先刻聞たが委しい譯のと
 問返され恥しながら斯くと一伍一什と難く
 うちお虎の飯の仕度としてやがて二階へ運
 上オヤ〜一緒お寐てお在かと思つて火鉢
 も進んだ安さんお前も遠慮深ひ何は兎
 もあれお飯を膳と出されて額と撫是の種
 御厄介實にお前の手が明たら些ども疾
 く耳に入頼んで置たの事の有とて安次郎の
 飯と喰ふ中からお秀の始末を云々と断し怒
 に目のないお袋どの私も常〜聞て居れば
 此嬢か藤間へ歸つたら酷い阿責の其上で又



久吉を客よしろと迫られるは知れぬ事それが否さよ死ふとまで思ひ詰ると聞て見れ
 の宅へ歸とも不安心何れ私か此嬢の姉のお玉さんお内々断し何様よか道を付やうから
 氣の毒ながら四五日のうち此所に預つて呉まいと折入て頼むにぞお虎もお秀と憫
 然に思外あらぬ安さんのお頼み其所の私が呑込だが直にお前がお歸りぞ此嬢が心細
 うらふどつくり心の落付やう能く断しでもしてお進とお虎の氣で何所までも二個の
 出来た中と思へば枕を二ツ押遣て素知ぬ振で階子を下れ跡は二個がさし向かひの互
 も何か底恥のしく然ども豫て心で思ひ合さる中あれば手が障しか何様しさか(編者
 も其所まで探りゑず看客宜く推すべし)斯て其日の夕方は安次郎のお秀お別れ尙お
 虎にも呉頼んで北の新地と立出たが時間の後れし故宅の首尾とも如何と思へを藤間
 へ廻て居らさず直お我家へ立戻れを伯父の平兵衛の大腹立まで顔と見るより目とむ
 き出し住吉参りと宅を出て昨夜ばかりの今日も一日定めて何所へか穴を拵へ悪い遊び
 を爲おつたらふと天窓おなしに阿り付ると伯母が見兼ねて宥めても平兵衛の聞入す一体

貴さまが三味線なぞを習いせやうとしたりして放蕩者お仕立たのだ此後の藤間の素
より門三寸も出さぬぞと厳しく言渡された故其夜お玉の所へ行て内談とする事もなら
ず其次の日も平兵衛が自分の側へ引付て帳合などとさせる故安治郎の氣が氣でもなく嘸
藤間で騒動をしてお玉も心配をして居るならん若もお直がお虎の宅と喚付でもして行
かせまいり然もない所が馴染もあいか虎の宅にお秀の居て何故沙汰をして呉さいと氣
と揉抜て居るであらふと思へば心がそり／＼して置算盤も手に付ねば伯父はいよく
怪しんで目よおさねを四日はうりの心あらずも日を送りいる又お秀の日來戀しいと思
ひ焦し安治郎に必死と救ひれたるのみか殊にわりあさ中となり嬉しさ限りあけれども
其夕方に別れの後今日尋ねて来るさうの翌日は便りがある事かと待と暮せど沙汰
も無く又藤間でも那晩うら定て騒いで居るであらふが安さんからお玉さん内緒の断
しのあつたなう深切氣のある姉さん故内外の者の目を忍んでも尋ねて會に來さるる等
を是さへ何の沙汰もあさう若安さんの當座の花と私とおなぶりなとつこのと思ひ過

せば胸せまきて三度の食もおち／＼と咽喉へ通ぬ物案事お虎も俱々氣は揉れど態と笑
ひふ紛らして安さんもお前の事を嘸氣お懸てお在であらふが何のお宿の御都合で出に
くい譯でもありませうのう何を其うちお便りごとと案を種々／＼慰め四方山の断しや物
の本あさ出して見せれどお秀の頻り又鬱入て眼に涙のみ浮めて居れば困つた物と思ふ
うち既に四日も沙汰がなればお虎の如何にも不審お思ひ安次郎の近所へ行て聞合さ
うのと思つてもお秀の素振がさうならねば若もの事あつてはなうぬと片時も眼が放
されず人を頼んで遣ふにも壁お耳ゆへ安大事と心と痛めて居る所へ不圖安次郎が遣
て來た故オヤ安さんでありませうかと歡ふ聲と二階で聞きつけ飛立程の嬉しさに我と忘
れて階子からバタツサお秀の下をよゝるとお虎も安次も見駭きア、コノお前も大膽
お誰ぞ來たうどお爲さるる目で知らせるに心付きお秀の其儘上に揚ると二個も續い
て二階へ行き扱て安次郎は宅の不首尾を箇様／＼と物語り然ら言ふ譯ゆへ藤間へも一
寸知らせる事もならず又お前方も心配と私も氣が氣であつたなれど郵便を出し事さ

へも人目があれを出来のねて夫ゆへ便りも
 仕なんだが伯父公も少しの心の解たの今日
 の八幡筋中橋の河傳方まで商用で行て來れ
 と言われた故ヤレ嬉しやと思つたの車
 乗て一散走り一寸様子を嘶しに寄たと言ふ
 にお秀は疑ひも怨みも爰お解たれど此身故
 に伯父さまにお腹立をさせましてはと詫る
 と安次は打消てハテ夫とても今更言た所
 が歸らぬ事何はさし聞き藤間の方の片を付
 ねはさらぬの他人て居た時と違ひお前と
 斯う言ふ中おあつてはお玉さんに嘶すにも
 氣が咎めて工合が悪く何様した物と三人が



額と寄せて相談として別工夫のあるてもあく空しく時が移る故遅くなつて伯父
 公の手前其うち寛りと來るらとて此日とそあくに歸つたが其後は尙々藤間へ行く
 も敷居が高くなつた故ニ、儘跡で知れら又其時の分別とお秀も度胸と極させ渠
 の飯料衣類の素よ其餘の入費とお虎に渡すも部屋住の身は自由おあつたせされど引お
 引かれずお秀の世話とするお付て悪事とは知りあがら伯父の掛先の金お種々の遣
 操弄段をして始めの晝のみ通つて居たが離れたあき事よりして折は觸てはお虎の許
 へ泊つて歸る夜もあると伯父平兵衛は夫とは知らず娼妓狂ひどのみ思へば或は阿り又
 は諭せむ伯母のお嘉野も俱く陰廻つて異見とすきば其度毎お安次郎の眞實恐入
 たる休おて頻りに二個お詫入をど何分お秀も捨たき彼譚柄がある故伯父夫婦の目と
 忍んでの夜中お脱出す事杯があれば今は平兵衛も腹に居のねこんな奴と宅へ置てと少
 しも安堵がならぬとて豫て親類の續合ある丹波國何鹿郡物部村の谷口忠次方へ渠と預
 たる内談と安治郎の泄聞て然らる時自分免もあれお秀の身体の振方がないと又

一層の苦をまして千々心を悩したが最う斯きつて是非及ばぬ永の年月養はれし
恩を誓ふと思へともお秀を連れて此地と立去り何國の浦にも身と落着後日お伯父へも藤
間へも人を頼んで詫せんと詮方なさの不了筋から逃ると心は決しうが夫ふの旅費も入
る事も多宅の金とを何様かして持出したと思へとも伯父もなか／＼油断せず少の金
でも仕舞込み固く錠とおろした上で鍵の腰を離さねば是も困つて又二三日胸と痛め
居たりしに或日豫て出遣入とする朝日丸の船頭源助が伊豫の大洲の花主先か／＼注文
物と頼まれたと金を十圓持て来た折う伯父の願へ行き伯母の用達しに出た留主の
間も天の與とをし戴き素知の顔で懐中へ入れ日の暮るのを待受て兼／＼心構とし
此の衣類と竊も携へ忍んでお虎の宅へ行きお秀に事の次第と断し伯父に之實に濟ね
ども脊に腹と換られねは斯う言ふ始末で出て来から最う此地おは居られぬと言れて
お秀のうら哀しく私のお前まで陰くらみ身おするのみか親身も及ばぬお玉さんお
苦勞と懸るをつもりで譯も知らせず立退くといわんまり義理を知らぬやうで夫の私

は氣に懸と言も涙のオロ／＼聲をお虎は下から聞付て何様お爲のたど二階へ揚り様子
を聞て打駭し思ひ掛あいか宿の不首尾今更詮方もあい譯たゲテ此上のお二個で何國
を當にと問懸られサア是と言ふ目的はあけれど豫てお秀の實の親と雲筋松江堅町は居
れば何卒一目逢たいと此程のう／＼渠が断し一先彼地へ趣いて尋ねたなら居所の捜し
當らぬ事もあるまい然うした上で兎も角も跡の始末もする積りと安次か言へとお虎は
心得夫とはあしに出雲へ行へ便路あどを聞合するお大阪より松江まで陸路を行けば百
六里あれど備後尾の道まで便船に乗れば先は三十六里も船路は如いあしどの事故出
船の日取を聞終にお秀と安治郎はお虎も厚く禮と演べ夜に入り人目に掛らぬやう
心細くも住馴し大坂の地と發足あすと名残惜し氣にお虎も付添西國橋西詰ある出船の
場所まで見送りしは明治八年十一月廿五日事などぞかくてお虎お別れ尾の道へ行く
押切の早船觀音丸へ乗込ぶが其夜はありの次の日も風悪ければ出船もあらず二個ども
に日影の身あれば若や追手のあ、らふかと思へば安き心もせず冷／＼物にて潛んで居

るうち又次の晩の雨が降出し迎も是でい出帆のちぬと乗合の大勢が何れも欠びをす
 ると見てといよ二個の困つて居るの夜明前く空晴て殊も順風になりたりとて船
 夫が俄に帆を巻揚げ稍東雲お及ぶ頃と兵庫の沖お至しおは二個は始めて安堵して
 四方の景氣と打詠め少一憂と忘る、うちいよ順風が打續きて廿八日の夜の十二時
 尾の道に着船せしにお秀は少老船心地悪るしと言へば取敢ず上陸して宿を求め其夜は
 安く枕に着き夜が明て起て見ると雪交りの雨がをく降故是は迎も踏出されぬを一
 日逗留とい思つたかれと旅費も多分あるでとありお秀の疾く雲筋へ行て親に會たい
 心もあきば此宿屋にて松江へ行道の様子と聞れば此行先と坂道多く迎も人力車杯へ
 乗て通行さぬと言ふ事ゆる草鞋と買てお秀にも履せ雪の中を踏出したが互の旅の
 始めてあるお目口も明れぬ吹雪とあれば一町行ては足と休め二町たつては息と吐け
 は何分道もはら取らず十二時過とも思ふ頃市村といふ所お着き爰で晝食をして居るう
 ち滋く雪は烈しくなり殊もお秀は足と痛めて歩行ゆる体おれば餘義なく其所に泊

り込み次の朝疾く起ても矢張雪が烈しく降
 きど何時晴るとも知れぬ空とベンくとし
 て居られねば出立爲やうと爲至と此街道は
 不自由成迎宿屋く心付晝辨當と安治郎は
 腰に結び惱むお秀と願まし乍ら又綾町のさ
 どる程に寒さと肌と貫く如く手足も凍て先
 へ進ず實又困難極りしが折のう行方の百姓
 家又焚火の見に力を得て不遠慮乍ら頼で立
 寄り圍爐裏に身体と暖まるお少し人心地お
 成し時幸にして空も晴日影も見る様お成し
 に安治郎歡んで厚く其宅へ禮と演へ立出の
 爲たき共お秀の又もや足と痛て頼お難義の



体ある故安治郎は氣と揉で種々勞り杯する所へ一頭の馬と曳て後のら来る者あれと是
幸ひ安治郎が呼止何方遠行と尋問の小草村とて三里程先へ荷を附に行と言ふ夫の丁
度幸と十銭に其馬を雇ひお秀に乗と勤めるとお秀は是迄馬杯に跨がつゝ事もあらず
の怖さも怖し恥の敷もあれど安治郎の深切も無おもされねば胸ドキ／＼に馬士に乗て
貰ひぶる／＼鞍につのまつて行に安治郎も附添て稍小草村へ着し故爰にて準備の辨當
と開き須臾休息をし居るうち又もや小用が降出しので困た物と思ふ折ら七村迄
の歸り馬に乗りしやうぬのど勤めらるゝ又其馬にお秀を乗せて日の暮頃に七村に至り同
所に宿と求ふ此地は至極の山中にて宿屋座敷へ携つて見れば座敷の模様も只あらぬ
に臺所の圍爐裏の端は何事やらん高調子と荒／＼／＼氣な嘶しをすれと若難題と官掛
られ要目でも遇ふ事はないかと怖さ其夜は落／＼寝られ夜明の後様子を開々ば
戸主の村の目わらし故座敷に捕索とあり又臺所の高嘶しも夫等の談合など知れ
よ／＼なき心と痛しと竊み笑つて其家と立出夫より正原檜皮古市廣瀬と官ふ村／＼

泊り種々／＼の艱難辛苦とて三十六里の道程と七日目の暮方に幸く松江に到着せし
同所八軒屋町ある大村五郎右衛門方に宿を取り彼堅町は何所と問へ爰より南へ五
町はのぞ天神橋を南へ渡れと則ち堅町なりと言ふに翌朝二個は身形を粧ひ件の宿屋
と出く見れば名もあふ舊の城下丈戸敷一万軒ありて商店割烹店劇場小屋その餘の家
居も建連たれば浪花を出より久／＼／＼斯る繁花の土地と見ると二個は心面白く程なく
堅町へ趣き老の番地の素より父親の名前も確と知らざきを先年大坂から此地へ来たお
宇野と言ふ者の宅は何所と片端から聞て見も其名と知りし者さへあられとお秀も安治
郎もガツカリしてす／＼宿屋に立戻り夫等の嘶を戸主おまて心當りはなきのと問は
五郎右衛門は打察夫は空にお尋ね者殊に堅町邊は六年前大火は焼くまだ普請が半分も
建崩はせ居る程ゆゑ多は他所へ轉居て仕舞た者も有様子併遙／＼遠方お尋ね
なすつた事あれば此身も俱／＼心當りを聞合せて進ませずが熱く知れば宜かと頼りお
首を捻られていよ／＼望みは失ひあがら折角爰まで来たのらんと其後所々を捜し

歩行稍半月も逗留とすほど少老の手掛りも
 てもなく今詮方盡果たが此儘浪花へ歸ら
 ぶにも日蔭の身では夫もあらずニヤヤと
 したる能のらふと只胸をのみ苦しめたが斯
 ういふ時は酒でも飲で氣を轉するより外は
 ないど當所で有名ある割烹店鳴玉樓へ二個
 で立寄り既二階へ揚らふとする時這方の
 障子の小蔭よりオヤお秀さんと言あひの
 妓もヒュッコ顔と出さるハテ始めて来た
 此土地に名と知る者はない筈だのど能く見
 れを其以前大坂新町南通り一丁目の大安方
 に勤て居た小鹿といふ藝妓ゆゑオヤお前は



どお秀の駭た小鹿も吃驚した休が立あがらでは嘶しも出来ぬまア二階へと俱に揚
 り老の此小鹿の大坂にて藝妓として居た其頃より折々藤間の宅へも来て安治郎とも知
 つて居れば別てお秀と睦まじく姉妹のやうと思つた中ゆへ爰で會ても遠慮なく互ひ
 の無事と祝せし後お秀は我身の艱難辛苦終に安治郎と伴なとれて實の親を尋ねたさに
 遙く此地へ来た甲斐もなく半月ばかり捜しても今に少一の手が、りもなく然るのと言
 つて此儘お浪花へ歸る事もなから跡へも先へも行かれぬ譯と嘶せを小鹿は駭いて然い
 ふ譯をあらましたか私も先頃餘儀ない事此地へ流れて来た時は西も東も知らぬ中心
 細いやすでまたが住は都の譬の通り殊もと斯ういふ繁花の土地で會席料理も此の外に
 青柳交房杯といふ立派な見世もありすゆへ私も稼業が可かりに出来てまア安心して
 居ますかお前さん方お二個も緩く逗留あさるうちには阿父さんや阿母さんの安否
 も知れるのであせませう又御不自由な事もありは遠慮のいかに姉妹とも思つて嘶しと
 して下さいと實意ある言葉もお秀は素より安治郎も歡ぶすち誂への酒肴も出れば互に酒

を汲交し久し振て心の憂さを忘るやうに思ひしが其後と小鹿のお秀等の居る宿屋へも折々尋ねて深切にして呉る上に同國の大社へ參詣爲やうと勤めなき這方の旅費の乏しけれど否とも言とれを伴はせて師走をかし話つて立歸つたがいよいよ安治の懐中がやつかしくあつた故或日お秀が小鹿に向ひ私等二個が鼻を勘へ宿屋に喰て居ましては素より多分の時へもかく先の所が案々なき、は私達相應を稼ぎと何のあるまいと聞かして小鹿の打案じ此間も言ふ通りお金も手支る事でもあらを何様も工面として進やうが併夫でと氣濟もあるまいお前の稼ぐ積りある幸ひと鳴玉樓の仲居が一個不足ゆゑお前が那所の仲居お住込み又安さんも一緒と思へど夫では却つて能くさいなら那天神の表門前に鮮店と出して居る大坂北久太郎町一丁目の蛇の目鮓の息子さんで先年此地へ見世を出したが私も追々懇意あつて宅同様にして居ますのう其所へ頼んで預けて置けば朝晩顔も見られる譯まア然しては何様でせざと言ふお秀は歡んで安治則とも相談の上お秀は鳴玉樓の仲居にありし別品の上は優しやか故追々客の最負と受

け不時の賞ひも餘程あきを可ありに衣裳も出来て行く又安治郎も昨屋へ行て最初と出前の持出しる迄の手傳ひして歩行て居たが後お魚を造へ覺へ一端店の役に立故毎月三圓の給料と賞ひ改めて雇人となれば自分の身トんまくも出来俱に安堵はしたやうな物の斯ても親の安否が知れねバ只夫のみ苦にして居るうち待ぬ月日の早晚過て明治十年の六月にありしお縁で鳴玉樓へ来る客おて唐物を手廣く商ふ菊重と言ふ人が来る度毎に給仕お出るお秀の顔と情く見てハテ能く顔が似て居ると獨言を折々お秀の聞度に氣にあつて堪らぬ或日又來て言出したのうお龜の面おでも似て居ますると笑ひながらお秀の聞くと菊重も打笑ひイヤサ先年此身の宅へ雇ひ入をて久く仕つて石井佐兵衛の女房お宇野お瓜を二ツと言ふいが聲色までが生うつしと云れてエーイと吃驚小膝をぞめ其お宇野さんと言ふお方の年齢と何歳位で當時は何所へ居らますと問へは菊重が少し考へ然うサ今では四十の上と七ツハツも越しふが元は大坂の産とやら其以前私宅へ雇つて使つた佐兵衛といふ者が些不都合を事をして放逐く遣た後

彼の浪花へ趣いく彼が宇野と夫婦なり子
 も二個程設けたが佐兵衛と兎角放蕩の止ま
 る果の悪い病と受て身體の利あくあつた故
 何分にも活計が立ず些の親戚と心當に又當
 國へ立歸りよと彼が品行の宜りゆぬもあ
 親類とても憐れ付す實に困苦の體と聞さ私
 し少一の金を恵んで堅町の裏家と借り住
 とせて置ずちに終に佐兵衛の病死して跡よ
 残るゝ女房が宇野と其時二歳の男の兒のみ
 實に哀る姿で居たが宇野の至極の誠實者
 にて佐兵衛の放蕩も愛相も盡さず貧苦の中
 で長の年月夜の目も合せ老看病としたと近



所て懇ぬ者もなきに其甲斐もかく本夫も死なば馴染も薄ひ土地へ来て嘆困らふと思つ
 た故我の方へ引取て下女代りに使つて居るうち又媒妁とそる者があつて同じ堅町の魚
 渡世西田勇吉といふ者方へ連子としく再縁をしよが運拙くも先年の大火の爲め類焼し
 て餘儀なく渠等は大坂へ立越へ天満信保町に住居の由を其頃手紙で報知さぬ私はず
 二三度づゝの商用で彼地へ行々を序に立寄く見た所又勇吉が長の病氣で困窮の体が
 氣の毒さに聊の金を恵み其後また尋ねる時あり高津町どのへ轉宅とどばかり番地も確
 と知るなんごから其儘に歸國はしよが今に折し思ひ出と調子乗て菊重がツヒ放心く
 と嘶しあつた不圖氣の付けは傍よお秀のシク泣て居る又側に小鹿までが眼は涙を
 ば浮く居ると菊重と不審に思ひ何様一たのだと尋ねくもお秀は胸が一ぱい故俯向た儘
 で返辭とされぬを小鹿は夫と察したも涙を拭つて斯うくとお秀の身の上の始末と
 語れと菊重も駭く諸と豫てお宇野の断し三ツにゐる兒と大坂で養女に遣つるとや
 ら言たが夫がお秀であつたか親と尋ねて遙く来たとい實に見上た心榮此上は少しも

疾く大坂へ立歸り以前渠等が住で居た天満信保町の戸長に係り何をも轉宅爲やうとも存生でさへ居る事なら母に會れぬ譯はあゝ僅きれども旅費の足にと金を三圓惠た故にお秀のりか小鹿まで涙と俱お禮を演斯て菊重か戻りし後お秀は急ぎ餅店へ行た安治郎の其嘶しとすれば然やいふ譯あらさし闇を習日にも發足しやうと言たが假初あがら三年越し居て馴染の人も多くあれを彼是引止ふを終に七月十二日に松江と出立たりとそ〇是よりお宇野に面會の嘶しお取續くるをも紙員に限るあきは第三號に譲り解分るべし

〔定價金五錢〕

明治十一年十一月八日御届
同 年 同 月 刻 成

京都府平民

編輯者
兼出版人

植村 太平

下京第十三區奈良物町
三百七十貳番地

西京新京極蛸藥師下ル

製本賣捌所 太田 權 七

同新京極三條下ル櫻ノ町

同 原田與三松

西京寺町御池下ル	壽 昌 堂	大坂堂島中一丁目	靜 雲 堂
同東洞院七條下ル	四 達 堂	大坂平野町淀屋橋筋	石川 和 助
大坂心齋橋備後町	吉 岡 平 助	同備後町心齋橋角	泉 萬 助
同心齋橋北久太郎町	柳原喜兵衛	同淡路町心齋橋東入	坂 田 傳 七
同心齋橋本町南へ入	片 桐 仲 三	丹波龜岡河原町	内 藤 半 七
同高麗橋三丁目	集 成 舍	江州大津今とろし町	勸善舍支店
大津京町三丁目	澤 市 二 郎	江州八幡新町	大 内 弊 六

右之外新聞配達人持テ居升

○ 京仕立花乃魁

第二號

右成版延引致しお待兼の比看客宜敷は斷り上は其
かとり三號の一月早々賣出やい

○ 貫徹數箇經說法

一名おうの與兵衛情談

書入活版
全一冊

○ 奇病稀體 不具奴自流

澤村田之助怪傳

書入活版
全一冊

右の十二年一月の初賣る出版致しやい不相變は愛
願と乞ふ

魁舎敬白

相村太平編輯

京仕立花の魁

第三號

明治十二年一月刊行



○ 京仕立花の魁

第二號

右成版延引致しお待兼のほ看客宜敷は斷り上し其
かとり三號の一月早々賣出やい

○ 貫徹數箇經說法

書入活版

全一冊

一名おうの與兵衛情談

○ 奇病稀體 不具奴自流

書入活版

全一冊

澤村田之助怪傳

右の十二年一月の初賣出版致しやい不相變は愛
願と乞ふ

魁舎敬白

植村太平編輯

京仕立花の魁

第三號

明治十二年一月刊行



京仕立花の魁第三號

植村 太平編輯

名にしわふ櫻の花の色よりも尙超へ勝る女郎花貴賤上下の隔なく愛で戯れて生涯の樂
とよそあしつるの古しも今も異らねと戯ふ樂も戀苦みも戀と言し如く是より種々の幸
事を引き思はぬ浮瀬を渡るにこそてもお秀の安次郎侶供お松江を發足するお付て
鳴玉樓の主人と素より小鹿その餘の朋輩おどより夫とくお錢別を贈り阿母さんお
會なふ一緒に此方へお出ささいよと言つ、見送る人達お名残惜氣に別と告て二個の彼
地を立出たが先年來掛の難所お懲て今度は本街道と行しお人力車おども便利なる故却
つて路次の運も疾く五日目の午後五時前に大坂に着しかの久し振にて古郷を見たる二
個は心嬉しけれど互お人目を憚る身おれば櫻橋南詰の櫻源と云ふ旅人宿へ雲笈者と云
なして泊り日の暮ると待兼て二個の土産物と携へ例のお虎の許へ行けば吃驚する程歡
んでまア二階へと二個ををし揚お虎の手疾く茶を淹へて持て上るも待詫顔なる二個の
先年厄介にあつた禮を演たる其上にてお秀の藤間の様子と問へり安治郎は伯父濱田平

兵衛の安否如何と尋ねるに予お虎は頼りに點頭て濱田さまでも藤間様でも皆お變りありませんが噂を聞きば藤間ではお秀さんより豆茶屋から脱出した其跡と久吉さんが大腹立でアツキやお直も同腹にて娘と逃したる相違ないら金返せと首出すとお直さんもお怒でお前お渡の娘と逃され此儀行方が知れし時五十や百の端多金で此損毛の埋無と双方共お狂氣眼で願の引のと言さうだ何様捜してもお秀さんの行方が一向知れ故迫て死だ物で有ふと一時の鳴が鐵つゝが夫お付ていお玉さんが噓心配で有ましうらふ其後安様の家出る付て濱田様より私の所へお懸合の有た事と藤間て聞込た物と見へ諸の二個で逃亡と勘付さ濱田様へ藤間より届く候ても取合ねと又私の所へ来て彼是と言けれと存せんと打拂つたので夫も泣寝入お成ましたが夫に付もお二個さんは三年越お便もあく何様あされたかと案て居たと思掛るい無事のお歸是の譯有ませうと問返さきて云々と松江で有し趣と言葉短お物語お秀の實母が大坂と聞急いで歸て来からは翌日にも尋ねに行ふけれと誓ひ世間を憐る身もある此上の作苦勞序に天満信保町の會議

所へ行き西田勇吉と其妻お宇野は當時何所へ轉居しかを委しく聞てと下さるまの頼めお虎と打案ト夫のお安い事あれと追々年老て耳の疎くて殊にそん役場なごへは是迄行た事もなければ幸に隣家お重兵衛といふ至て實氣者あつて豫て懸念に爲ますれと渠と頼んで進ませうと頼て重兵衛と連て来しゆへ安次郎はお宇野の様子をお秀と俱に委しく断し何れ明晩様子を聞に又來ませうと別を告げ二個は襦袢又旅宿と定めし櫻源へ立戻り安否如何と待とに次の日お虎と連立て重兵衛が遣て來る故待兼ましたお虎さん然うして母の在家いとお秀が問へばお虎と點頭さまア歡んでお呉れあるさい重兵衛さんの働さて早速先が知れました委細の事はお前からと言ふに重兵衛進み寄り今朝天満信保町ある會議所へ参りまきて書配又調べて貰ひましたと西田勇吉は先年世を去り後家のお宇野と伴龜吉は高津町三番町百六十番地へ送籍をしたと委まて教へて呉ました故直高津町の其番地へ行き西田お宇野と尋ねましてもそんお人はいとされ又もや其區の役場へ参り取調べて貰ひましたら阿波座中通と二丁目へ引越た

と言ふ事、解り阿波座へ行て種くど捜し
 歩行て見ますすち漸く同所の裏長屋にお
 住居なさるに尋ね當とお宇野さんお目に
 掛つて此方のお嘶を致しました。夢では
 ゐんかど歡ばせども疾く連て來て會せて
 呉どのお願ゆへお虎さんお仔細を嘶し俱
 く是まで夢としましたと聞くにお秀も安次
 郎も飛立何どの嬉しさに厚く重兵衛の骨折
 を謝し白晝は遠慮の身の上あれど須臾も猶
 豫のさきぬとて直る車の頼んで還たが表向
 夫婦とも言にくい安次郎が一緒に行くも工合
 が悪さに先お秀とかり行く事と決し土産物

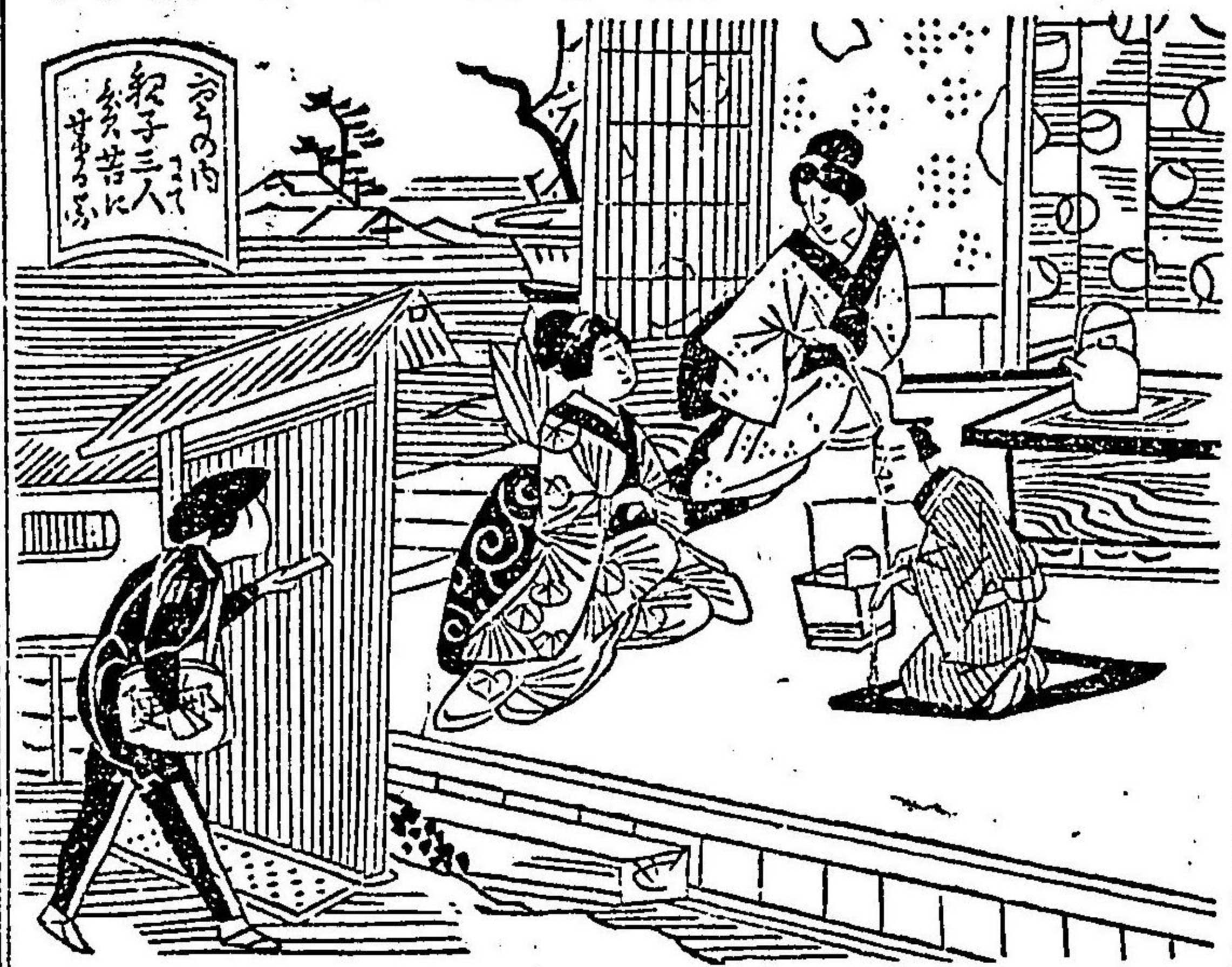


おと取揃へ重兵衛と合乘にて車を急のせ阿波座お至り淋しい路次へ這入て聞々は奥の
 二軒目と言ひる、と見れば戸口も荒果て貧苦も然みそと想像られお秀の親と見ぬう
 ちうら頻り胸の塞ぐると夫と心み察しあふも重兵衛は然氣なくお宇野の門の障子
 と明々お連すして参りましたと聞より母の我を忘る其儘表へ飛出して扱とお前がお秀
 のと言ひきて這方は耐り兼物をも言ひせ泣出すと近所の手前も如何と思ひまア〜内
 へど重兵衛が勧め立て座へ揚ればお秀の尙もせきあぐる涙ながらお日來戀しい懐しい
 と思つゝ實の母さんお扱のお前でありましたのオ、娘かと抱き合ひ須臾の程の母と子
 の生体もあく歎きしのお宇野は僅に涙と拂ひ和女の辛苦の荒増の爰にござる重兵衛さ
 んが嘶して聞せて下さつたが堀江橋で身を投ると助けて今にお世話ある安治郎さん
 と言ふ方へと問ひれてお秀の何とやら母の手前も恥のしさお答へ兼ねるを重兵衛の察し
 實の是くと仔細と嘶せをそんな遠慮が入る物ぞ命の親あり二ツよの翌とも思ふ人あ
 れば私も疾く會ういとお宇野の言へば氣輕な重兵衛然ういふ譯なう一走り私行て安

さんをお連ずして参りませうと重兵衛が安治郎と櫻源へ呼ばれた其跡お秀の藤間
で養ひ種々の辛苦をせし事より終に出雲へ行ての事まで十四五年の憂難と些ども
漏さず物語れをお宇野の涙よくさのらと和女が藤間と言ふ宅の養女にあつたと言ふ事
の今日聞たのが實に始てお前の父さん佐兵衛どのが先年の長の煩ひ其時和女の僅り三
ッ龜吉と言ふ弟も出生をば子供二個と病人と私が女の手一ツで何様爲やうも詮方が
なく折折或人の嘶しには日向町樋の上よて小間物を賣る宅で子があくて欲がるゆゑ道
てはどうだど翻められ心ならずの思へども脊は腹は換られぬと音信不通の約定めて和
女を其所へ遣へ時樽料として金と三圓貫以受へした物の内一圓の謝禮に取られ残る二
圓も焼石に水より疾く遣ひあく一餘儀なく本夫の生國故出雲へ行へ後の事は菊重さん
のお嘶しで具に和女の歸た通其後私に二度の本夫と持氣のさくく無つなはれと深切
あして下ればとて子供を抱へて菊重さんのお世話ばかりあつて居られず勇吉どのへ
再縁して此大坂へ歸つて後又その本夫と死別れ見る影もあいな今の身が杖とも頼む龜

吉か優しく成長してはや今年は十六故堺筋久寶寺町の讃岐屋といふ小間物屋へ雇奉公
に遣て置くも同商賣ゆへ萬一して和女の安否か知れやつかと思ひし物を思ひさや藤間
とやらに居やうとの扱は先年貸ふとき態と其名と偽りしうと此嘶しのうち安次郎と重
兵衛お伴のれ来てお宇野と初對面の挨拶より又操返して右左と言出る事あるべけれど
くだくし々々を略きて載す看官宜しく推すべし其時お秀の弟龜吉お頻りに會たき体
あるを母もまた會たければ再び重兵衛と勞はして讃岐屋の店まで行て貰ひ須臾の暇を
乞請て龜吉を呼迎へしが爰に至りて姉弟が面を合す歡びは然るる想像るほど短かさ筆
よ盡されねば這も又宜しく察すべし斯り後にお秀も安次郎もお宇野の宅も同居は爲
たれど兎にも角も安次郎は伯父の許へ詫入て歸參と爲たれど當人も思へばお宇野も
又我が娘の危急を救ひをたる事よとて不首尾となつた事あれば身に換ても安次郎に
歸參をさせねば義理が濟ぬと又その重兵衛を頼込みお宇野も連立て濱田方へ行き段々
の仔細を演て歸參の事を詫入れと堅氣一編の伯父平兵衛ゆへあかしく承知せ老幼少よ

り養育を大恩と打忘れ女の爲に現と抜し
 種々不都合とした上金を盗で逃亡し實に
 言はふやうなき不埒者ゆへ我等においては
 甥と思はれ最早別々養子も爲たきは歸參の
 素より對面も決し致す事でない取て
 も付れぬ返答と袖あすつて種々と言葉
 と盡して泣付てもケンモホロ、に打拂はさ
 お宇野等は術あさにすこく歸つて斯と断
 せむ安次郎は力と落せど別々詫入手段もあ
 く殊にお秀と二人よて斯る貧家の厄介あ
 れと些の稼代もあふざれば遣ひ残りの旅費
 の金後にお秀の衣類とは質入などして朝夕



の煙の代と做しつ、も心苦しく日を送るうち或日お宇野の二個お對ひ斯う言出しさ
 鬼のようお母とも噂や思はふが何卒お秀と安さんの縁を切て貰たい委細の譯ハ此文に
 と言ひれて兩人は打駭さお宇野二個お對ひ譯をも言はせ縁切の断りと私に仕掛た故
 噂吃驚もお爲だらふが安次郎さんの歸參の事と其後も手と換品と換お詫として聞入
 なく迎も私力では届りぬ事と歎いて居た今日濱田の伯母さまのら測る郵便で届
 いたお文と披いて見れば始めにお宇野深切と厚く禮と演たる末に何分伯父の怒り強
 ろの今この所で歸參を許す氣色も見へぬ殊にお秀どの、宅に居て其親公から詫ら
 ざるのはいよいよ怒が増すのみなれば當分二個が縁と切り私の實家へ出入とする福
 引市造といふ者へ内々断しして置たれと安次郎が彼方へ參り世話にあつて居るうち
 にと伯父の機嫌と見計ひ詫も致せて見ませうの安次郎に此旨とお傳へなされて下さ
 るやうよと最細くと認めあると讀よりホロリと涙とこぼし親身の伯父さへ愛相と盡
 そを他人の伯母が是程まで思つて下さる冥加な此身お罰の當ふかと思へば實にそ

ふ恐しい此の上の深切な伯母の意に随つて福引方の世話もあり其うち伯父の氣も鎮ま
り歸泰の時節もあつたから積る御恩の百分一も賣ての報乏たい心然と去りながしコレ
お秀和女の心も開ぬうち我が上をのみ並へ立たし薄情者とも思ふが身が立ささ言ふ
でいさい既に濱田の他方の養子も貰つて有と聞けば歸泰をいたとて那宅の跡が續れ
る譯のなけれど何卒往くく伯父夫婦に安堵がさせたいばう里故是のら福引方の世話
で何所へあるとも奉公お住込み家の一軒も持やうにあつたう伯父の方の詫も叶ひ其上
でい改めて一緒おられる時節もあらふ殊に斯して此宅のお世話になつて居た所が是
と見据た稼業もなければ却つて母公に心配と掛るばりの事だらう愛の道理と聞分て
須臾の間互ひに別れお主も何ぞお袋の手助ある事をして活計と立て呉るの能と事と
分た安次郎の言葉とお秀も無理とは思ふねと只哀しう伏沈み何と返事も出かねるを
お宇野の然らうと差寄てオ、お秀道理トや三年以來見も馴ぬ他國へ行て憂苦勞漸く母
に廻り會ヤレ嬉しやと思ふ間もあく飽も飽れもせぬ中を切よと勤める此母と胸燃るど

も思ふが浮世の義理とあきらめて須臾のさちいや得心までと右左より論さきてお秀
は漸く顔を上げ物体ない其お言葉私へに安さんい長の年月旅寝の辛苦故郷へ歸る
と晝中の世間を憚るお身あしたを惜い奴とも思ひ召す母の事まで彼是とお氣を付ては
は深切最ふ此上の仰しやる通り私も得心爲まいたから母子の事は案なく福引とや
らへお越しの上一日も疾くは歸泰と私も陰の祈りまそ未練な事と言ふやうあれど此
後お顔の見られども折く無事で居といふお便り丈いと掛て又も涙あひせ返ると
慰め兼し安治郎もおうのも俱も堪かねて袂を顔おとし當つ、須臾辭もなさ折かゝ爰ご
くと遠慮會釋もあらしく門の障子と引明て思ひ掛さる藤間のお直と跡に續いて
代言摸擬の文次と言へるがツカく這入るお顔見合吃驚爲これども躲れやうも逃や
うも一方口の狭い一間途を失つてウロくするをお直は見つ、聲振立畜生阿魔の大膽
まも三年越しに身を匿一大恩受た養親能も難義を懸をつた其荷擔の安治郎おうのとや
らにも言分あきと夫等の事は跡にして文さん婦を逃さぬやう些とも疾くと目て知らず

ればオ、合點と文治が立寄り狼狽廻るお秀とは無理に手取り引立ればお直も俱に附
 添て爲すまし顔も出行とアノマア待てと止たさの胸も十分餘れども匿した落度が此方
 ああきば今更何と口も出ささすおうのむりか安治郎も只茫然として居たの此儘捨置
 べきよあらねば頼て二個は連立て例のお虎の宅へ行き彼重兵衛にも来て貰つて事の子
 細を物語りどうした物と談合あ及へと渠等二個も駭くをかり養ひ親お喚付られ連歸ら
 せと聞て見ては此上何と掛合たどて迎も返しは爲まいと言ひをかうのは氣拔のし
 やうるのを安治郎が慰めて阿波座の宅へ連歸つたがお秀がどういふ酷い目に遇て居る
 かと案下らるるをば其夜は更に臉も合ねば同じ思ひお安治郎も左さま右さま思案のうち
 不圖心付たのは彼福引市造にて渠安土町井池に住み大工職の棟梁ある頗る俠氣ある者
 ゆゑ會て嘶しをして見さら能き分別もあらふと思ふ心をかうのふも告げ翌朝疾く井
 池なる福引方へ趣けば折から大勢の弟子共が今朝飯の最中たる様で伯母うら内意もあ
 のて定めて安治郎が來であらふと心待よして居る事故夫と見るより市造はヤア此方へ

ど座敷へ通し委細の事伯母さまうら聞て
 承知をして居まどの何と言ふも那通り昔
 堅氣の旦那さま先當分のお秀さんとやらと
 表向別れた体で少し御辛抱あさるうち此歸
 泰さへ叶つて仕舞は私改めて媒妁にあり
 立派に婚姻をさせまど杯と此方の腹の中も
 知らず我が言ふ事のみ長くしく市造に断
 し掛られ氣が氣であけれど安治郎の夫と言
 出すしやがなれば只モソとして居た
 が思ひ切つて云々とお直にお秀を連れて行れ
 實にお宇野の心配を側も見ると痛ければ
 何様の兄貴の骨折で取戻して下さるまい

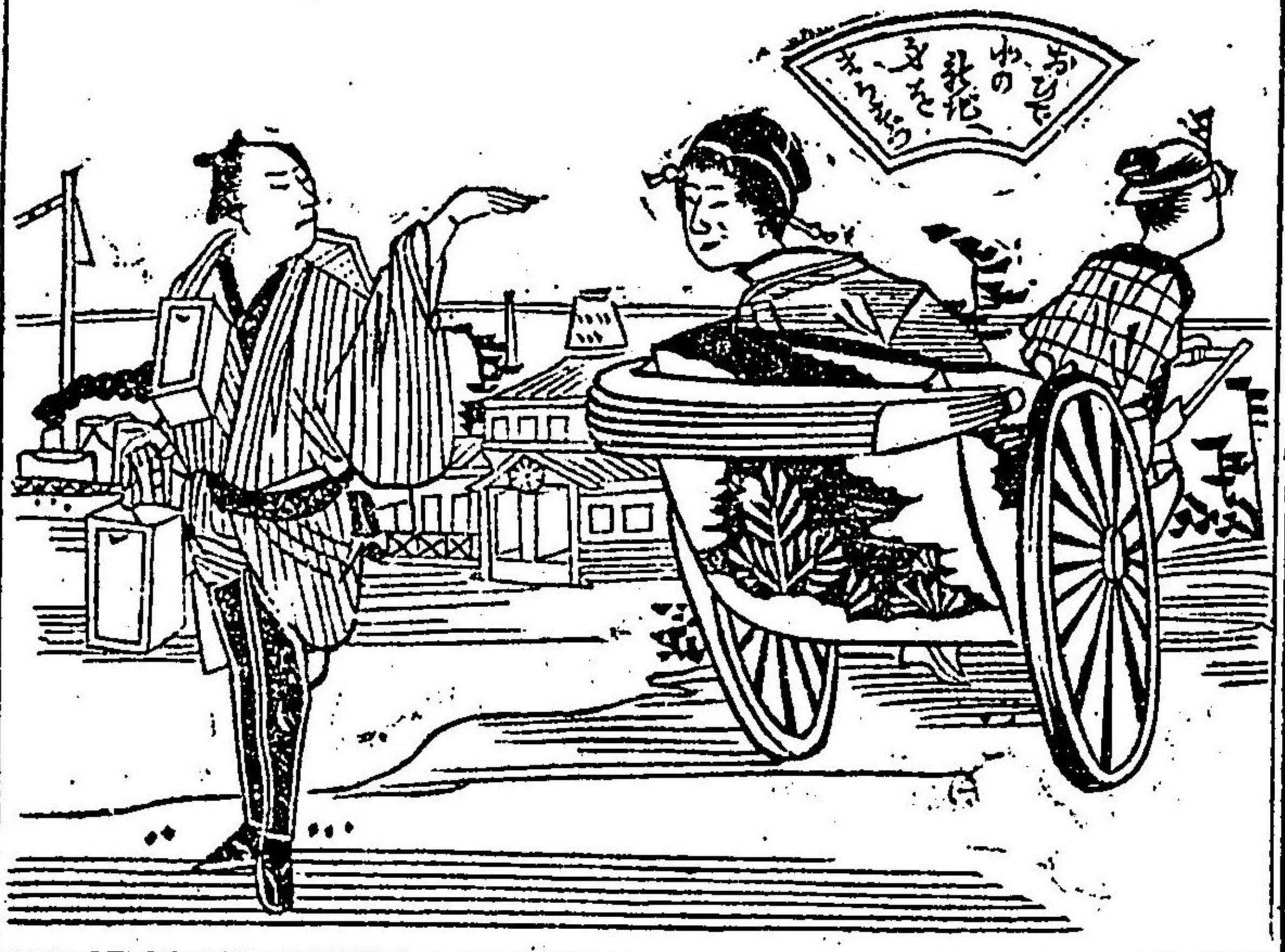


かど折入て顔み掛れ心市造の小首と傾々成程夫の氣の毒なれと幼少時から養ひれたか
直に連て行れての實母ありとて彼是と掛合付る辨もなく殊に私に此一件に關係する時
は伯父公御夫婦に何分濟ねば是心ありはお断り。トキ言ふ筈の所だかお前のお胸もお
察しやせば一應先へ掛合て娘の安否と見届けの上何様とか断えを付ませう何れ兎もあ
れ久し振るお米(女房の名)お燗を付て來ると言ふ安治郎はヤン嬉しやと思つたも此
とも疾くお宇野に断して渠も安堵がさせなければ酒と言ふのを断つて立に懸ると引
止めハチアア急息は及びません幸はひ貰つた肴もあをと言ふうちお女房お米のは
や酒肴と運び出しサアお一ツと勤められ流石むかにも歸れば心ならずも二三杯汲交
して居る表の方へ車夫らしい男が來て頼引市造様のお宅の此方でおさいますとかと問れ
ハイ手前方でございませとのお米の答へを聞くや否や車の母衣と外させてお宇野とお秀
と侶俱に遠し氣に駈込を安治郎と見て駭かみながら仔細あふんと思ふも為渠等はお宇野
とお秀ありと市造ふさ、やうに直に二個を座敷へ通しまつは挨拶もする筈もさど何の

様子も有りげなれば掻抓んだお咄しと承はらふと市造が言へとお宇野は聲をひそませ
今朝安さんが出られた跡へ此様か逃て來よ一たのら委細を聞と泣ばかり何き追手が來
やうと思へど私ひとりで思案も出ねを無遠慮ながら此のお宅へ内へ連て参りましたが
何様か爲やうはあしますまののサモ心配な体で咄せば安次郎も氣と揉で兄貴困つた
譯おなつこの何分お前のお力でも是も心配な顔付を市造は見て打笑ひナニ是まきの端
多おとど苦勞よとるおは及をあん万事引受てとぎにり咄しと付やせう幸ひ持合せの私
の盃お知己にと清まて獻せばお宇野の胸がツクツクしてなう酒と飲む所でなくお
秀も今にも追手が來て引立られたら何様爲やうと慄へて居れど市造の矢張平氣で香で
居る故安次郎も安心ならず一寸と言て市造を次の間へ立て貰ひ御酒の中をお邪魔とし
ての寔にお氣の毒でどか那通り母子の者が心配もして居るし殊にお直と言ふ婆アハ一
通りであいの女の上に渠に附添て來た男も一癖あるべき面魂故尙く安堵がなりませぬ
を何卒母子の氣の落着やう言て聞せて下さいと呉頼めば點頭て元の席へ立戻り私のお

一旦呑込だら假令相手が鬼であらふが後へ引ねへ氣性だら氣遣ふ事は些とも無併此
 嬢が驅出たのう先でも彼是行先を探索をして居たらふから匿一立と却て面倒私の所
 へ逃歸たも弟子を遣て知せて置其上ではお秀さんを姪の積で懸合の手續は先斯と云都
 合にしてと其概略と尋さ告をとおずのを始め三人は始め安堵の思をせしるゝ願て硯
 を取寄て手前姪お秀事只今私方へ逃歸未だ委敷は承はらねば敏と聞糺せし上よて後刻
 罷出申上べく先取敢て無事の段お知せ申と認し手紙と弟子の彦太郎に持せて藤間方へ
 遣一さの姑あつて立戻藤間へ行たらお直は留守で年若お婦人の居故夫に渡して來ま
 たと言故其年若お婦人ど大方お玉さんであらふとお秀等が尋さ合へバ市造は獨り
 ち笑み扱にお直は察しの通りお宇野さんの留主へ押掛け無駄足とせし物ならん願て歸
 つく手紙を見たら目と丸くして來るは必定その時お前さん方の此方に在くは面倒もへ
 此嬢と置てお歸りなさるとも又二階へ揚つて居て私の掛合とお聞なさるとも御勝手次
 第になさいと言はれ左様あら私等の一先宅へ歸せうら何分共に宜敷とおうの安次

郎の暇と告が市造に任せて立歸る入違つて
 例のお直は文次を引連れ遣て來て又の悪
 口たらしてお秀を連れて行ふと言ふを市造
 は温順に先初對面の挨拶を演べ私はお秀の
 伯父おれと承らく東京へ参つて居た故彼の
 云々之些とも知らず一昨年坂地へ歸つて後
 姉のおうの、断まて渠は養女に遣と聞
 何卒一度の會たい物と思へば養家の住居も
 知れず實の尋ねて居た所へ此程雲霧から立
 戻り様子を聞けば貴女の許で御養育と受た
 趣き段々のお世話有難しさを態と長く
 しく辨し掛ると半分聞かずお直は焦燥假令



お前の伯父であらふとらんか人への用はかい私の娘と連れて歸るに離れ遠慮がある物の
 文さん承知か。合點だとお秀の手を取兩人が引立行ふとする所。オィお婆アさんま
 ア待ねへ成程一旦此嬢の遣たがめんまりお前が不法だか今改めて取返すと旨ふよお
 直顔色變く文治と俱る左右より戸主の側へ膝と突付タコリヤ面白い市造さん取戻せる
 なら戻して見なせへ三ツの歳も此お秀の乞食のやうな狀で居るのと金まで恵んで貰ひ
 受り着せて喰せて藝道まで長の年月仕込で遣り是の少し金儲けと思ふ矢先家出を
 され段々聞けば安治郎とちくり合ての逃亡とはめんまり面を憎い故見付次第に連
 歸り娼妓又叩き賣てありと腹を癒やうと思ふうちお宇野の宅にぬくくと酒ませく置
 このは夫も奴等の尻押し假令伯父でも實の親でも貰つてこの此方の娘妙る文句で威
 走付くもそんな事でも怕るやうあ甘んお直と見違へたお素直にお秀を渡さずは恐るが
 らと持出して奴等に泣面させた上大手と振て連れて行とお直が首へは文次までが流る、
 如き辨舌にて頻り追れど市造の笑ひなむらお直の顔とシロリと見て訴へるとも願ふ

とも夫は其方の勝手次第第九もお秀の三ツの時養女に遣たに違ひのさいが娼妓にしても
 淫賣にさせても苦くさいと言ふ証書をお宇野は渡さばせぬどの事すべて男女の縁邊
 は親の意のみ任せ難き素より世間情通あると夫に何や久吉より五十圓の金を
 取と厭悪がるお秀と無理無体に彼豆茶屋へ連れて行か殿し官の法度を犯し親の口から
 淫賣を娘と勤める不法の仕方是非あくお秀は其場と脱出し既に入水と覺悟をせしを折
 よく安治郎が來合せて助けたとやふそ今の存命若うの時と救はれずは可愛やお秀の非
 業の最期然成時はお前の手で殺しとも同ト事らんお無法お人の宅へ大事な姪と遣て
 は置きぬ尙此上お言寫らば恐るがと此方の出掛るまでの事だけれと夫でめんまり
 と艶りねて愛等を篤と考へて和な断志に爲るさきと養育料の些と位は色も付めへ物で
 も無お袋思案は何様ですと、とへ烟管は脂下りピツとも爲な顔付お文治はお直の袖
 を曳き相手お悪いと眼で知られば腹の立とも備るさお又考へて出直さすと其日は打
 連立歸つたがお直も頗る然る者へあかく甘い酢で喰へず此後も種々紛議と未終

お養育料百圓にてお秀を離縁と事ご極ると
 お宇野は再び氣を揉出し娘のお蔭で取戻さ
 されど身費の中で百圓とはコリヤ何様えた
 ら能からふと悴龜吉まで呼立て工夫は無い
 うと相談をしてもまた年若の事あれば是ど
 金策の道も亦く實に困ると市造の聞て私も
 其所等と察きて居るのら種く工面もして
 見さぐ何分急又は調はず然うのと言て是迄
 にお直と掛合詰たの今更金が出来あいと
 て日延をさるも何とやら斯さいふ破目にあ
 つたからい否であらふが些とのさちお秀嬢
 を藝妓にて調金するより外のさいと餘儀



さい漸しにお宇野母子もお直に連て行れるより増と思へを得心しく北の新地の大西席
 へ出稼の藝妓とあり金百圓前借としたので藤間の方の譯と付け漸く籍と取戻し又お
 秀の身廻り其外の入費の分は市造の取賄ひいよく新地で弘めとさる前あつと市造
 が言ふおは扱是かふり安さんの身の納りが肝要ゆゑ改めくお秀さんに離縁状とお渡
 るさいと三條半と安治郎お書せ渡すをお秀と取兼て又クヨくと愚痴を言ふをハテ是
 とても表向伯父さまの前むかりの事故互ひの心が變らねは行々私が取扱つて目出度夫
 婦おして進ると市造の堅く言ふので得心して一通を納め夫よりお秀は小秀と更め始め
 て座敷へ出た日より容貌と言ひ取廻しまで優しやのよく愛敬もあれ心客の受も至極能
 く追々流藝妓とさるば先一方は是でよめ扱是からの大役と或日造り手土産を持
 て濱田平兵衛方へ行き無沙汰見舞に來て体にて旦那さまはと尋ねれば豫く伯母とい内
 くに喋し合せし事もあれを其場の都合と取計つて平兵衛お會せし故市造の世間漸し
 と種くと漸し掛伯父の機嫌を見すまゝと實と今日上りまゝたも安治郎さまの事に

先頃より私方にお世話を致し居りやすが當時は至極の改心で殊にお秀とは敏に手
と切り伯父さまは夫婦は實にお濟ない事といたる責て一度は安堵をおさせやしては
養育の思ひの少しも報いたいから何卒お詫をしてとをかり言暮しくおさる体がかいた
としくもあります一又情くど考へればお秀の一件より外に放蕩となつた事のない
安さんで見ますれを渠と手切あつの上と最寄大丈夫と請合ますから何分よもは勘辨
とと種々お辭を盡しと説ても餘程偏固な生質と見へて伯父の却つて腹と立不所存者安
治郎を彼是のばい立とせるお前の腹の解を兼まて向後の私の所へ出遣入無用と言捨く
其儘奥へ引込だ故伯母と頻りに氣の毒がれと又今更お術なきお尙安治郎の身の上を内
々市造お頼ひゆる這方のガツカリ力も抜さが必要なさいますと別れく我が家
に歸つた後は安治郎の氣の變らぬやう程よく濱田の様子を漸し其儘宅に養つて置けば
安治郎は食客の身となすを爲す事もあく暮して居るを氣の毒思ふ故お米がれ廢と止る
も聞ず毎日弟子の辨當を職業場へ持運ぶのと自分の役にして居るが其頃市造は宗右衛

門町の美石といふ藝妓の置屋の營繕を餘程受負て弟子下職の者なると日毎に大勢遣り
すに付安治郎は例の辨當を運び度く来るので自らの其家の藝妓若者後は主人おま
で心易くあり身体が閑暇もへ遊んで歸るが彼が人品恰好がなると職人の体でいさく
殊に折々帳合の閑しい時あどお手傳をさせて見と算筆も達者ゆへ或日美石の主人の
市造お安治郎の身元と聞故匿もささず是くと断せむ借は然言人であつたの實は
私方の若い者に三人程不都合があつて暇と出して不人もへどうせ遊んで居る身体なら
少し貸ては呉やいと頼まを立歸つて安治郎お断せば實に身体に持扱つて日を暮し兼
る折の故歡んで承知をしたので夫よ美石へ雇はれて行き是が爲安治郎が身を持崩
すの趣きは第四號に説解るべし
(定價金五錢)

明治十一年十二月二十二日御届

同十二年一月刻成

編輯者
兼出版人

京都府平民

植村 太平

下京第十三區奈良物町
三百七十貳番地

西京新京極蛸藥師下ル

製本賣捌所 太田 權七

同新京極三條下櫻之町

同 原田 與三松

賣

西京寺町御池下ル 壽昌堂 大坂淡路町心齋橋東入 坂田傳七

同東洞院七條上ル 四達堂 大津京町三丁目 澤 一二郎

大坂心齋橋本町南入 片桐仲三 丹波龜岡河原町 内藤半七

同心齋橋備後町 吉岡平助 大津今ねろし町 勘善舎支店

捌

同心齋橋北久太郎町 柳原喜兵衛 江州八幡新町 大内繁六

同高麗橋三丁目 集 成舎 右之外繪草紙店新聞配達人持テ居升

同堂島中一丁目 靜 雲堂

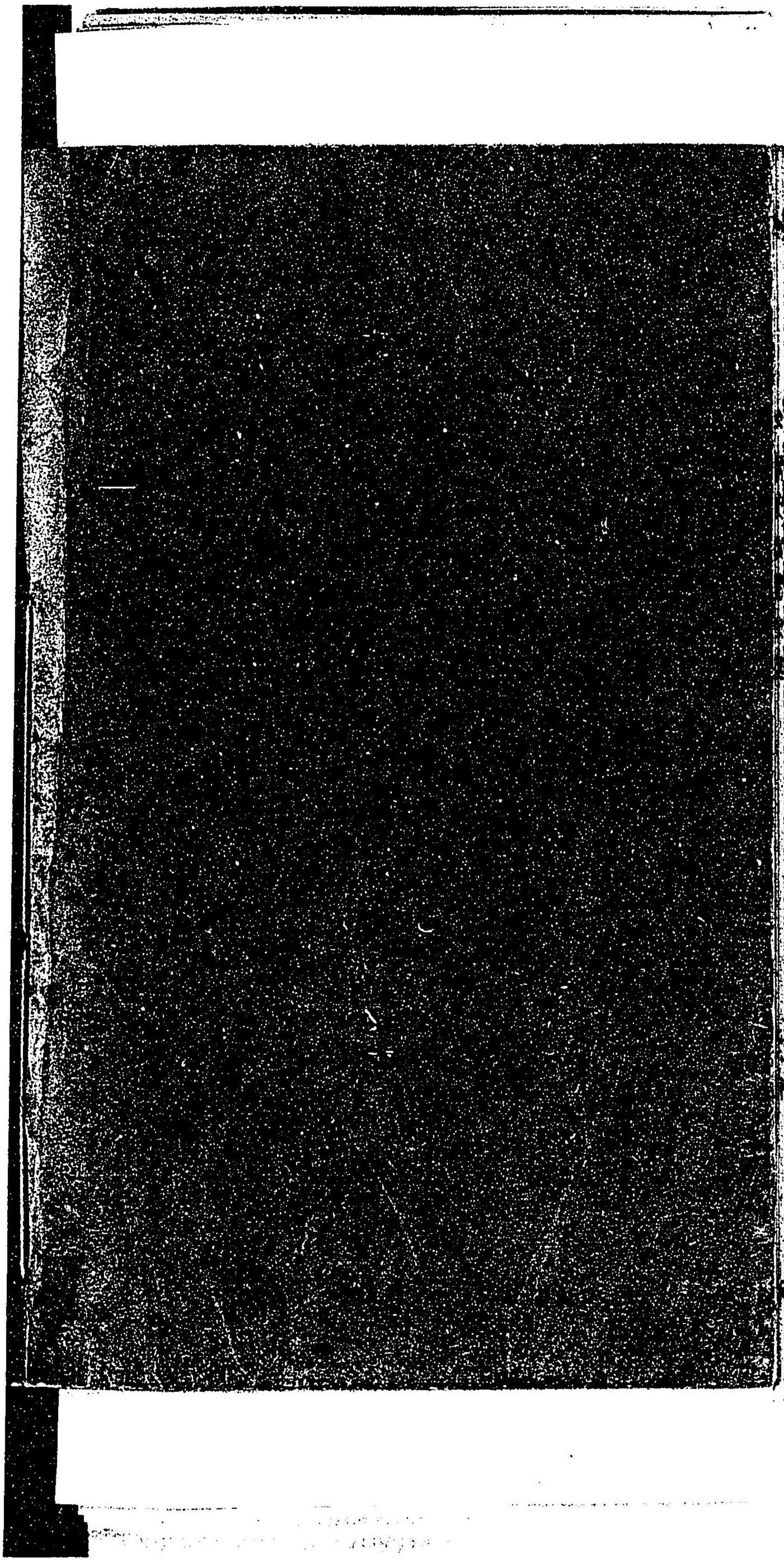
所

同平野町淀屋橋筋角 石川 和助

同備後町心齋橋角 泉 萬助

(印刷村上活版所)

Man wird nicht allein gerettet
in der Dürftigen Pforte
Der Jungfermann



特41

106

091412-000-1

特41-106

京仕立花の魁 第1-3号

植村 太平/編

M11-12

DBN-2319

